

傳馬町御店迄さし出し可申候 万一故障御座候て 三
月後ニ至り候ハ、飛脚やに出し可申候 去冬貸進仕
候 八人抄も急ニ御返しニ不及候 当夏迄ニても慥成
御幸便ニ御かへし可被下候 尚申上度事多御座候へと
も あまりに長文御多務中御覧も御煩勞と申遣し候
昨今少々手透を得候間 心緒過半備御笑申候 頓首

冗紛中例之乱書失敬 よろしく御推覧可被下候

〔紙背継目上端ニ「追啓」下端ニ「瀧澤」トアリ〕

一条申遣し候 金ひら船七編の内 富士山の翻案は
日本たましひニて貴意ニ叶ひ候よし 幸甚々々 只富
士のミならず 右一編の結局 うかのみたまをとり出
し 瑠璃壺 はせを扇 勾大刀 金の繩を 神酒瓶子
御田扇 注連等にいたし候をハ いかゞ御覧被成候哉
こゝら聊作者の用心ニ候処 何とも被仰下候ハ 遺憾
なきにしもあらず 只合巻と見なかし給ふにやあらむ
金魚傳下編 覺縁尼の事なとくと御覧奉希候

三 〔文政二三年〕九月一日

一筆致啓上候 追日赴冷氣候処 弥御揃御清福可被成
御暮奉賀候 然ハ八月六日出之御状順着忝致拜見候
其節は京都地震の写本 早速被贈下御厚情忝奉存候
京師地震之説も処々來状等追々かり出し 写し留候
故 右写本もその内へとぞ込 致秘藏事ニ御座候 く
れくも御礼申演候 尚又かねて御頼申候御かけ参
大坂中旅行の一枚すり 何とそ御幸便ニ御下し被下度
奉頼候 此外明和のぬけ参り 夢物語 并ニ此度も右
夢ものかたり様之実録もの出板いたし候ハ、御幸便
ニ御下し可被下候 代料ハ追て御勘定可致候間 御失
念なく奉願候
一 俠客傳著述之事 当地丁平殿を追々御承知と奉存候
此節専ら取懸り居申候 当暮迄ニ式編迄十冊 せひ
く不残書たて可申存候 但筆工書こみ合 何分只今

の内ハ筆工出来かね さし支こまり申候 尤来月ニ至
り候ヘハ 合卷さうし筆工不残書終り候間 よみ本斗
書せ候故 十一十二月ニははつ行可申候 中川^ニ氏の外
ニ仙橋と申筆工も有之候故 一冊つゝかゝせ可申存遣
し候処 書やうよろしからず 用立かね候故これハ止
メ申候 板下宜しからす候てハ ほね折候てもよめか
ね 且ほり立製本の節 ざく本ニ成り候間 筆工書を
第一ニえらミ候事ニ御座候 中川氏ハ年来拙作筆工は
かりいたし罷在候間 筆やうかなつかひ等のみ込居候
当月中にハ合卷書終りて 夫々来三月迄ハよみ本筆工
のミかゝせ申候つもり 談し置候 只今之内板下及延
引候義 右之仕合ニ御座候間 此段御承知可被下候

一尚又御面倒御頼申度候

唐本

一金聖歎本小刻水滸傳

代金毫兩位までニて毫兩の内ならはいよくよし

高くハ御無用

一参考太平記

代金右同断 毫兩式朱位までならハ

右之さし直ニて本手ニ入可申候ハ 御とり入被下

来春迄ニふなつミ幸便ニ御下し被下候様奉願候 岡荷
ニてハ脚ちんも格別餘計かゝり可申候間 ふなつミの
節御つミ合せ可被下候 尤水滸傳ハちとはかりの品故
岡荷ニても並便りならハ さのミ脚ちんかゝり申し
く候間 岡荷ニても宜御座候 もし高料ニ候ハ、御
見合せ可被下候 只今々暮迄ハひたすらよミ本著述ニ
て 読書のいとま無之故 春迄ニてよろしく御座候
早春ハ諸板元々とし玉等をもらひ候故 かやうのなく
さミものかひ入候ニ便宜ニ御座候 代料ハ差引ニても
正金ニても無相違 御勘定可致候間 是亦御失念なく
奉願候 先ハ八月中御答旁如此御座候 恐々謹言

九月朔日

瀧澤篁民

河内屋

茂兵衛様

尚々 追々赴寒氣候 折角御自愛專一と奉存候 丁平
殿も久々風邪のよしニて 対面不致候へとも 使ハ不
絶参り よみ本両様とも無由断被致世話候間 御安慮

可被成候 已上

四〔天保二年〕四月二十六日

尚^一追^二向暑ニ赴キ可申候 折角御自愛可被成候
二月中旬^一当月中旬迄霖雨ニてふりつき 一円風
邪流行いたし候处 四五日已来久^二くにて 日^三日
の光をおか^ミ申候 御地はいか^ニ候哉 大かた同様
ト被存候

一筆致啓上候 追日温暖之時節候被成 御揃御安全被
成御暮目出度奉存候 然ハ当月十一日^二之御状 同廿三
日ニ相達 忝致拝見候 正月十七日御出立ニて 長崎
へ御旅行被成 四月朔日ニ御帰府之よし 初て致承知
長之御道中御障も無之 重畳目出度奉存候 右ニ付
当年は当地^ニ御出府御座被成よし御尤ニ奉存候 且又
春中以書状御問合せニ及候類句之事 古今類句ニ哉と
御たつね之趣承知 御申越しの如く古今類句ニ御座候

直段之義金^一毫兩^二内ニてほしく候趣 御頼得御意候处
手帑を見たかへ被成候哉 毫兩迄ト御申越被成候 毫
兩ニてハ当地ニも本可有之候間 御無用ニ被成可申候
毫兩^三内ニ候ハ、いつ也共御つミ合せの節奉願候
外ニ素本源氏物語 下直之品御座候ハ、一処ニ奉願候
是ハ娘^ニ遣し候本ニ御座候 湖月抄ニ候ハ、弥よろ
しく候へ共 直段はり候間 素本ニて式分位之処ほし
く御座候 古今類句 素本源氏兩様ニて 金毫兩式分
位迄ニ候ハ、被遣可被下候 それ^三高直ニ候ハ、
御無用ニ被成可被下候 決して急キ不申候 当年ニて
も来春迄ニても 下直之本御手ニ入候節奉願候 直段
之処間違不申様御聞置可被下候

俠客傳さし画 追々彫刻出来の様子ニ御座候 二編め
の事御催促之趣致承知候 少しも如才無之候へ共 当^二
二月上旬^一兩人の孫引きつき^二き庖瘡いたし 無難ニハ
候へ共 久々か^ニり ひま入多く候上 老妻二月中旬
ハ病氣ニて 今以勝れ不申候 倅ハ本生病身ニて 且
無人家内用多く まことに筆とり候いとま無之 三春